

7. 精 度 管 理

都養育院 核医学放射線部 山 田 英 夫

RIA の精度管理の目的は、原因を明らかにし得る定誤差を出来るだけ除き、原因不明だが統計的に取扱える偶発誤差の統計精度を出来るだけ高めることにある。しかし、最終的には、施設間、キット間の誤差を無くし、どこで測定しても同じ値が出る様な検査法を確立することであろう。

定誤差をなくす為には、機械・器具の精度管理をしつかり行うこと、単純ミス出来るだけ少なくするチェック機構の開発、個人的なくせを除くためのデータ処理その他の機械化が必要である。

精度管理には数多くの方法がある。もっとも基本的な測定内精度の向上は、測定技術の習熟と良い測定系を用いることにかかっている。これによって各重複測定の精度をどの程度に抑えるかの問題を検討する場合には、Response-Error-Relationship の分析が有用であり、更

に各標準濃度における精度、いわゆる Precision Profile の作成は、ある測定系の持っている個有の精度分布を教えてくれる。これには標準曲線のモデル式の選択も影響を与えてくる。

測定間精度の比較には、プール血清・コントロール血清を測定することが広く行なわれている。前述の R-E-R, Precision Profile の再現性は大切な指標である。しかし、RIA においては、標準測定の実現性が、キットの性質を敏感に反映してくるので Bo/T, 各%の濃度の算出、各パラメーターの値などを分析することも大切である。

これらの問題は主として各測定施設において処理すべきである。施設間、キット間の誤差はコントロール・サーベイなどを通じて次第に明らかになりつつある。諸外国のキットが使用されている現在では、国際的レベルにて検討がなされなければならない。